令和５年度 NPO 等と連携した
こどもの居場所づくり支援モデル事業

「ディスレクシア児童生徒のオンライン上の居場所の提供と支援の実施」
報告書（公開用）

2024 年４月

特定非営利活動法人エッジ

報告書目次

①事業要旨.....3
②事業目的.....5
③事業の実施内容（成果に至るプロセス）.....7
④実施結果.....10
⑤分析・考察.....17
⑥成果の公表方法.....19

①事業要旨

ディスレクシア（日本語で 35 人学級に3人程度いるといわれる読み書き困難のある LD-学習障害）の児童生徒は不登校になりがちで孤独感を持ちやすく、学業が振るわないため自信と自尊心が低い場合が多い。そのため思った進路に進めないことも多い。これを解消していくために、こども家庭庁 NPO 等と連携したこどもの居場所づくり支援モデル事業として、特定非営利活動法人エッジは「ディスレクシア児童生徒のオンライン上の居場所の提供と支援の実施」事業を計画した。

ディスレクシアの児童生徒の要望を集め、ディスレクシア成人当事者が具現化を補佐し、当事者の当事者による居場所を構築するために、ディスレクシア当事者を主としたこども委員会、検討委員会を発足、こどもアンケートとヒアリングを実施した。また運営には特定非営利活動法人エッジの成人当事者会「NODE」メンバーが積極的に関わり、ロールモデルとなるディスレクシア成人当事者と児童生徒が交流することで自分を知る、仲間や先輩を知る、将来展望を抱くきっかけや機会が作れるようにした。

児童生徒の要望は「ホッとする場所」が9割弱でふだんの生活でホッとできる場が少ないことが想像された。以下「仲間と出会える場所」「好きな活動ができる場所」「将来の選択肢を知ることができる場所」「ディスレクシアの先輩に相談ができる場所」「自分にあった学び方に出会える場所」「自分の作品が発表できる場所」が要望として多かった。

要望がかなう場所としてオンライン居場所「メタ・エッジ」を 2023 年 10 月一部プレオープン、12 月にオープンした。児童生徒たちによる児童生徒たちで作る居場所をめざし、部屋の装飾や新しい部屋はワークショップを通して児童生徒たちがモデルルームを作り、イベントはこども委員が中心になって企画して月1回開催した。すべてのイベントにディスレクシア成人当事者が参加して、児童生徒たちと遊び、話をした。ディスレクシアの児童生徒が表現を発表して自信をつけるひとつの手立てとして、ディスレクシアアートコンペティションを開催した。

ディスレクシアの児童生徒は NPO 法人エッジの事業やイベントに関わってきた児童生徒や保護者、講座修了生、当団体媒体でつながる支援者に呼びかけて集客した。2023 年 10 月にプレオープン、12 月本格オープンしてから3月まで、6ヵ月の短い期間かつ当団体中心の呼びかけでは集客人数が少なかったのが課題である。全国に広げていくために、まず LD/ディスレクシア支援民間団体や地域居場所事業者との連携が考えられる。そして何よりも地方自治体がディスレクシア児童生徒を早期発見・把握して学びを支援する仕組みを作り、その中でディスレクシア児童生徒が集える場があることを周知していくことが、この事業に必要である。

ディスレクシアの児童生徒が、要望を出し合い、ディスレクシア成人当事者と一緒にイベントを実施、要望を居場所に投影実現していく仕組みは作れた。表現を発表する過程で、自信をつけて成長していく姿は明らかに見られた。ディスレクシアアートコンペティション並びにポスター制作の表現発表を通して、自信をつけて成長していく姿が明らかに見られた。「ディスレクシアだから大丈夫」「ディスレクシアと気づいたらできることがある、明るい未来がある」という展望が見えるという居場所の存在意義と、運営ノウハウを検証していくことができた事業となった。今後の継続には財政面、並びに地方自治体のディスレクシア児童生徒をする仕組み作りと周知連携が課題である。

②事業目的

ディスレクシア（日本語で 35 人学級に3人程度いるといわれる読み書き困難のある LD-学習障害※1）の児童生徒は不登校になりがち（※2）で孤独感を持ちやすく、学業が振るわないため自信と自尊心が低い場合が多い。そのため思った進路に進めないことも多い。

この問題を解消していくために、4つの事業目的をもって「ディスレクシア児童生徒のオンライン上の居場所の提供と支援の実施」を行う。

1つめはディスレクシア当事者による当事者として望ましい居場所づくりをすることである。ディスレクシアが知られていない、気づかれていないことが多い学校や社会の中で、ディスレクシア当事者の要望は顕著ではない。当事者や保護者へのアンケート・ヒアリングで全体の要望を明らかにすると同時に、当事者の意見を集約して、実行の中心となるメンバーを選出し、居場所を作る仕組みを構築する。

2つめは読み書き困難による学業不振や自信喪失にとらわれず、本来の能力や表現力を発揮する機会を得て、自信をつけることである。自分に合った表現方法に巡り合い発表する手立てのひとつとして、ディスレクシアアートコンペティションを開催し、その作品をオンライン居場所並びに対外的に発表する。

3つめはロールモデルとなるディスレクシア成人当事者に出会い、自分に合った方法や進路をみつける手立てを得ることである。当団体にはディスレクシア成人当事者で構成される能動的に社会発信をする会「NODE」がある。日常生活では保護者や教師以外の大人と出会うことの少ない児童生徒が、同じ特性をもつ先輩である「NODE」メンバーと出会い、学業や受験のような身近な学校生活を過ごす上でのコツや心得、将来の夢や進路に進むヒント、特性があるがゆえの失敗から学ぶことなど、当事者同士だからできる対話ができる場を作る。

4つめは、孤独感や困りごとをひとりで抱えて二次障害や不登校になる児童生徒を救うために、同じ特性をもつ児童生徒と出会い、仲間と気軽に話せる場を作ることである。35 人学級に3人はいるものの、その児童生徒同士が集う機会は日常ほとんどない。保護者からも自分のこども以外にどこに同じ特性のこどもがいるかわからず、仲間同士話せる場があったらいいのにという声が多く聞かれる。気軽に話せる場、情報交換できる場、趣味を発表できる場など、児童生徒のアイディアで作って広げることにする。全国規模のオンラインでの居場所をめざす。

※1 日本語で小学生の約7～8%の調査結果（宇野、2009 Relationship between reading/writing skills and cognitive abilities among Japanese primary-school children: normal readers versus poor readers (dyslexics)）英語で困難さが顕著に出る

人は多いがその統計は日本に現在ない。海外では 10 人に1人いることが周知されている。（参考例：British Dyslexia Association Dyslexia Awareness Week X https://twitter.com/BDAdyslexia/status/1710641288226168945）

※2 LD の 35%が小学校で、60%が中学校で不登校を経験する。小枝（2002 発達面からみた心身症および学校不適応の病態 Developmental pathogenesis in children with psychosomatic disease and school maladaptation）

③事業の実施内容（成果に至るプロセス）

1ディスレクシア成人当事者を主とした検討委員会を発足、定期開催する

2023 年8月にこどもの居場所検討委員会（以下検討委員会）を6名で発足する。ディスレクシア成人当事者、専門家、当事者支援者を主としてメンバーを選出する。

検討委員会は全4回実施する。
こどもの居場所に児童生徒たちの意見をどう具現化していくか、活性化していくか都度議案を検討する。

検討委員会の提言を受けて、居場所づくりに反映する。

2ディスレクシアの児童生徒へのアンケート、ワークショップヒアリングを実施

居場所を作るにあたり、ディスレクシアの児童生徒へのアンケートとヒアリングを実施する。

ディスレクシア本人たちがどのような居場所を求めているのか確認して、実際に居場所として要望を具現化していく。

3ディスレクシア児童生徒よりこども委員を募集、委員会を定期開催する

ディスレクシア当事者の児童生徒による居場所づくりをめざすため、その中核になるこども委員（メタ・エッジクリエイター）を募集する。応募者には参加したい理由、どのような居場所にしたいか、応募シートと面接で確認する。

こども委員会は全3回実施する。検討委員会の前に実施することで、こども委員会で出た意見を具現化するために検討委員会で検討できるようにする。

4ディスレクシアアートコンペティション開催

募集期間：2023 年8月4日～9 月 19 日
内容：テーマ作品「ディスレクシアが見た世界」 自由作品 2部門未発表もしくは新作
　絵画、デジタルアート、彫刻、映像、なんでも自由
対象：ディスレクシア当事者（診断はなくても受付、居住地や国籍は問わない）

小学校 3 年生から高校 3 年生および未成年ディスレクシア
審査：2023 年9月 審査員藤堂高直、末田航、下村雄飛（ディスレクシア当事者のアーティスト、ディレクター）
表彰：2023 年 10 月1日 メタ・エッジプレオープン時に表彰式をオンライン実施
発表展示：メタ・エッジ、エッジホームページ、当団体媒体

5ディスレクシア成人当事者で構成される「NODE」メンバーが参加する相談会を実施

ディスレクシア成人当事者で能動的に情報発信をする「NODE」メンバーに呼びかけ、ディスレクシアの児童生徒のイベントへの参加を依頼する。

相談会や児童生徒たちが希望するイベントに参加して、話し相手になり、悩みがあれば聞けるようにする。

2023 年 10 月にこどもの居場所をプレオープンして施策をテスト実施、児童生徒たちが話しやすい場所になっているか検証。12 月本格オープン以降の施策に反映する。

6ディスレクシア当事者インタビュー動画を作成。居場所で見られるようにする

ディスレクシア成人当事者が、どのようにして自分に合った方法をみつけていったか、いつでも触れられように、当事者会「NODE」メンバーにインタビューを行い、動画を作成する。動画は居場所で見られるようにする。

7児童生徒たちの希望で部屋をメタバース空間に作成する

こどもアンケート、こども委員会、検討委員会の提言で、児童生徒たちの希望をまとめ、メタバース空間と部屋の仕様整備や増設をメタバース制作会社 3rdSchool に依頼して整える。

児童生徒たちが作る居場所を実現するために、メタバース空間を作るワークショップを長期休みあるいは季節が変わる模様替えタイミングで実施する。児童生徒たちが作ったモデルルームは実際にオープンして中で遊べるようにする。

8全国のディスレクシアの児童生徒がいる保護者に周知、集客する

ディスレクシアのこどものオンライン居場所専用のホームページをオープンする。そこで概要紹介やイベント申し込みができるようにする。

当団体でアセスメントを受けた児童生徒、音声教材 BEAM 利用者、当団体イベント参加者、当団体講座修了生、寄付者、X/Facebook/Peatix フォロワーを中心に、メール、メールマガジン、ニュースレター、SNS で周知して参加登録を促す。

ディスレクシア月間 10 月イベントである、みなと区民祭り（東京都港区）こどもの広場ブース出展時にディスレクシアアートコンペティション表彰作品写真掲示やオンラインこどもの居場所の入ったチラシを配布して周知する。

④実施結果

1ディスレクシア成人当事者を主とした検討委員会を発足。全4回検討委員会を実施した

<検討委員会発足と委員会開催>
2023 年8月にこどもの居場所検討委員会（以下検討委員会）を6名で発足した。
委員長 藤堂高直 NPO 法人エッジ理事 NODE（ディスレクシア当事者の会）
委員 A.Y NODE（ディスレクシア当事者の会）
A.F NODE（ディスレクシア当事者の会）
慶徳大介 3rdSchool（オンライン居場所作成委託社 不登校支援）
曽利真弓 心理士、NPO 法人エッジ LSA 講座修了生、アセッサー
柴田章弘 NPO 法人エッジ理事 DX（ディスレクシア）会

ディスレクシア当事者として NPO 法人エッジに関わって支援活動をしているメンバーに加え、専門職かつ香川県在住で地域展開に関する検討のため曽利氏、居場所作成事業者かつ不登校支援事業者として慶徳氏に依頼した。

検討委員会は全4回オンラインで実施した（当初計画ではオフラインだったが委員の在住場所が海外、地方と広がっていたためオンライン実施に変更）。こども委員会の後に開催し、こども委員会で出た意見を広げる形で議案を検討した。

第1回検討委員会 2023 年8月 28 日
第2回検討委員会 2023 年 11 月 13 日
第3回検討委員会 2024 年1月 15 日
第4回検討委員会 2024 年3月 25 日

<検討委員会からの主な提言と施策への反映>
第 1 回 今後の進捗と居場所づくりのコンセプト確認

第2回
オンライン居場所の名前を複数案検討。
→「メタ・エッジ」に決まる。

こどもの居場所
メタ・エッジ

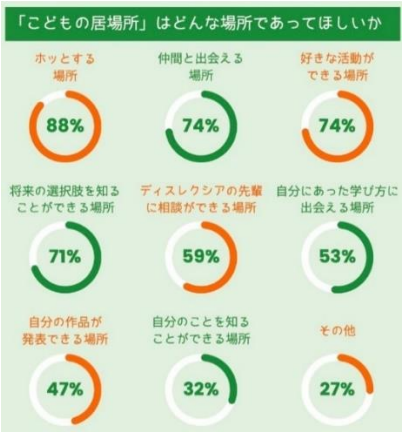
第3回
参加者を増やすには児童生徒たちだけでは登録できないので、保護者への説明と体験会が必要。
→2024 年2月に保護者説明会を開催。説明会動画を以降メタ・エッジ HP で紹介。
→2024 年2月よりイベント参加者への接続フォローを開始。2月、3月の2回実施。

第4回
ポスターはディスレクシアを知らない人に今後周知・啓発する際使えそう。実際にオフラインの場で使いメタ・エッジ集客につなげられないか試したい。

2ディスレクシアの児童生徒へのアンケート、ワークショップヒアリングを通して、児童生徒たちがほしい居場所を確認した

2023 年8月に当団体でアセスメントを受けた人、音声教材 BEAM 利用者、当団体イベント参加者、当団体講座修了生を対象にアンケートをメールで依頼、オンラインで実施した。
ヒアリングはワークショップで児童生徒にブレーンストーミング形式で行った。

<アンケート>アンケート回収数 36 名。
1位 ホッとする場所 88%
2位 仲間と出会える場所 74%
3位 好きな活動ができる場所 74%
4位 将来の選択肢を知ることができる場所 71%
5位 ディスレクシアの先輩に相談ができる場所 59%
6位 自分にあった学び方に出会える場所 53%
7位 自分の作品が発表できる場所 47%
8位 自分のことを知ることができる場所 32%



<ヒアリング>

2023 年8月開催のワークショップでは部屋をつくる前に、「あったらいいなこんな部屋」をオンライン上に付箋を貼る形式でヒアリング。以下の内容が挙がった。これを元にワークショップで参加者が部屋を装飾した。

▼ワークショップで作ったモデルルームとオフラインワークショップの様子

3こども委員（メタ・エッジクリエイター）に応募してきた4名が着任、全4回こども委員会を実施した

2023 年8-9月こども委員を当団体でアセスメントを受けた人、音声教材 BEAM 利用者、当団体イベント参加者、当団体講座修了生を対象に募集した。9 月にこども委員説明会を実施。立候補した小3、小4、小5、小6の4名をこども委員に任命した。

第1回こども委員会 2023 年 11 月 13 日（委員1名 スタッフ3名）

第2回こども委員会 2023 年1月 13 日（委員1名 スタッフ2名 検討委員1名）
第3回こども委員会 2024 年2月3日（委員2名 スタッフ4名）
第4回こども委員会 2024 年3月 24 日（委員3名 スタッフ6名）

どのようなイベントがいいか意見を募り、「おにごっこ」と「おしゃべり会」を採用して1月から実施。アンケートやヒアリングで要望が多かった部屋を増やし、一緒に名前を考えた。

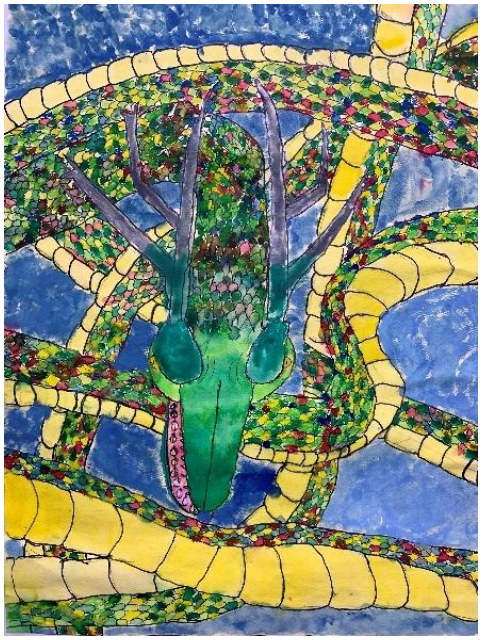
4ディスレクシアアートコンペティションにて優勝・佳作作品を選出。表彰式を開催した

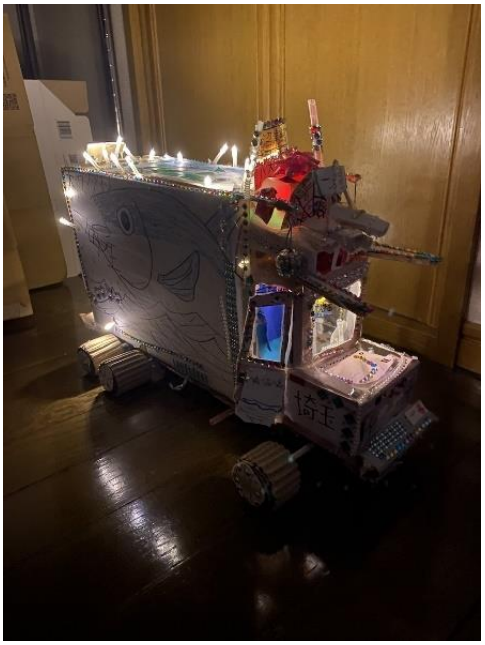
応募者総数は 18 件。「ディスレクシアが見た世界」5件 自由作品 13 件。小4～高2の応募があった。各部門優勝1名と佳作2名を選出した。

2023 年 10 月1日ディスレクシア月間オープニングセレモニーとして表彰式を開催、受賞児童生徒3名が参加した。審査委員長藤堂高直氏より審査員講評を伝えた。表彰状と賞金を後日送付した。

表彰作品は、メタ・エッジ、エッジホームページ、ニュースレター等で展示・報告した。

▼左 ディスレクシアが見た世界部門 優勝 タイトル「ディスレクシアが見た世界」
▼右 自由作品部門 優勝 タイトル「デコトラ」





5ディスレクシア成人当事者で構成される「NODE」メンバーが参加する相談会とおしゃべり会を実施した

<参加者数>
ディスレクシアの先輩と話そう（相談会）2023 年 10 月 22 日（こども3名、NODE4名）
おにごっこ　2023 年1月 21 日（こども0名、NODE2名）
おにごっこ&おしゃべり会　2023 年2月 17 日（こども2名、NODE1名）
おにごっこ&おしゃべり会　2023 年3月 17 日（こども4名、NODE2名）

10 月にテスト実施した「ディスレクシアの先輩と話そう」相談会は、アバターになった児童生徒からの質問に対して、アバターになった NODE メンバー一人一人が音声やチャットを通して回答した。「漢字の覚え方」「英語の文法をみにつける方法」について質問があった。勉強や生活の工夫について NODE メンバーから回答があり「自分に合った方法をゆっくり諦めずに探していくのが良い」というアドバイスを伝えると参加者から感謝の言葉や「人それぞれなんですね」という発言があった。

1月はインフルエンザ流行により参加希望者が欠席して参加者がいなかったため、NODE メンバーとスタッフで実際に遊んで仕様確認と改善案を検討した。

2月、3月は児童生徒たちの希望である「おにごっこ」をメインにして、ディスレクシアのお兄さんお姉さんも一緒に遊ぶようにした。こども委員より、ディスレクシアの先輩に困りごとを相談するというより、「いろいろ聞いてみたい」要望が聞かれ、アバターになって遊び、そのあとおしゃべりをする形式にした。

6ディスレクシア当事者にインタビューして動画を作ったが公開できなかった。かわりにみなと区民祭りでのミニトーク、オンライントークショーを開催した

ディスレクシア成人当事者会「NODE」のメンバーにインタビューして動画を作成した。しかし試写の段階で、動画に顔出しをしてオンライン居場所や全国に出ることに懸念が表明され、公開はできなかった。アバターになって撮り直すことを再考しているが、折り合いがつかずまだ再制作に至らない。当事者が顔出し（個人情報）することはセンシティブな問題であることをあらためて認識した。

動画のかわりに、ディスレクシア成人当事者会「NODE」で顔出し OK が得られたメンバーによる、みなと区民祭りでのミニトーク（10 月）、NODEオンライントークショー「僕たちが多数派だったら～もしディスレクシアが社会の大半になったなら、ぼくらの生活はどのようにかわるだろう?～」（10 月）を開催した。

7メタバース空間に部屋を作るワークショップを開催、部屋を公開した

メタバース制作委託会社 3rdSchool スタッフがファシリテーターとなり、メタ・エッジの空間に、児童生徒たちが好きなものを設置して部屋をつくるワークショップを開催した。

<モデルルーム作成ワークショップ開催日と参加者数>
2023 年 8 月 22 日午前オンライン（こども6名、スタッフ3名、委託先スタッフ2名）
2023 年 8 月 22 日午後 3rdSchool（こども6名、スタッフ2名、委託先スタッフ2名）
2023 年2月 17 日午前オンライン（こども5名、スタッフ2名、委託先スタッフ2名）

8メタ・エッジホームページを作り、イベント申し込みを受け付けた。当団体利用者のディスレクシアの児童生徒や保護者に、各種媒体で周知して集客した

メタ・エッジホームページオープン 2023 年 10 月
メタ・エッジホームページ上でイベント申し込み開始 2023 年 12 月

当団体でアセスメントを受けた人、音声教材 BEAM 利用者、当団体イベント参加者、当団体講座修了生、寄付者、X/Facebook/Peatix フォロワーを中心に、メール、メールマガジン、ニュースレター、SNS で周知した。

みなと区民祭り（東京都港区）こどもの広場ブース出展 2023 年 10 月7日・8日
ディスレクシアアートコンペティション表彰作品写真掲示。チラシ配布。ディスレクシアだから大丈夫 MIND マップ掲示。

▼掲示したディスレクシアだから大丈夫 MIND マップ

9ディスレクシアポスターをディスレクシアの児童生徒たちと制作した

2023 年 10 月みなと区民祭りに掲示した「ディスレクシアだから大丈夫 MIND マップ」を見てディスレクシアの児童生徒たちが夢を語っていたこと、こども委員も一緒にメタバース空間を作りながら夢を語ることがあったことから、夢へのきっかけとなる事物や表現を形にする施策を検討。

またメタ・エッジ周知と集客にはディスレクシア周知が前段階で必要であることが課題としてあがり、おとなとこども双方に向けた「ディスレクシア周知」「ディスレクシアと気づいてから自分に合った方法や進路をみつけるまでのマップ」「ディスレクシアのこどもたちの強みを夢につなげる」ポスターを、ディスレクシアの児童生徒たちと協力して制作することにした。

1 左 気づいてください。ディスレクシア　　2 右 ディスレクシアでも大丈夫

3 知ってる？ディスレクシア

ポスターはメタ・エッジ参加者、こども委員、メタ・エッジ検討委員会、エッジに関わるディスレクシア当事者の児童生徒にヒアリングを重ねながら制作。メタ・エッジ掲示板に掲示。

⑤分析・考察

1ディスレクシア当事者を中心に、声を集約・検討して居場所をつくる仕組みは有効

特定非営利活動法人エッジの 23 年以上の活動で得られたディスレクシア当事者との関わりとネットワークを活かして、ディスレクシア本人たちの声を集約する基本的な仕組みは構築できた。こどもアンケート、ディスレクシアのこども委員会、成人ディスレクシア当事者と専門家・支援者による検討委員会で、当事者が求めている声を吸い上げ、意見を具現化してテスト実施、改善を重ねて本実施するステップを実現できた。今後もディスレクシアの児童生徒ど真ん中の施策を計画・遂行するには、当事者の声をネットワークのある団体を中心に集め、当事者へのヒアリング、児童生徒だけでは具体的に表現と企画しきれない部分を成人当事者が具現化するステップは有効と思われる。

2参加者数の増加には周知期間と周知範囲の拡大、内容充実が必要。全国拡大には地方自治体がディスレクシア児童生徒を把握して支援、その中で周知することが望まれる

参加者数が少なかったことが課題である。周知期間は 2023 年 10 月プレオープン、12 月本格実施から3月まで、実質6ヵ月の短期間での周知を、構築と同時進行でするのが難しかった。当団体に関わりのある児童生徒や保護者、当団体媒体と SNS を中心に周知したが、全国拡大には至らなかった。2023 年 10 月に初実施したディスレクシア月間で LD/ディスレクシア支援関係団体と協力した実績を活かし、今後は関係団体とのネットワーク、また地方の支援団体や居場所をもつ団体との協力により、全国のディスレクシアの児童生徒たちに広げる足がかりはつかめるだろう。そして何よりも地方自治体・学校がディスレクシア児童生徒を早期発見・把握して学びを支援する仕組みを作り、その中でディスレクシア児童生徒が集える場が民間にあることを周知していくことが、全国展開には必要だろう。

オンライン上の居場所をディスレクシアの児童生徒たちと作っていく立ち上げ期は全貌が見えにくく、魅力を感じる周知内容にするのに苦心した。6ヵ月はテスト的に作っては改善していくステップだったのでやむを得ないが、今後事業を継続して、児童生徒たちが居場所をブラッシュアップするにつれて、具体的な部屋の提示と人気のイベント等を紹介できるため、周知内容の魅力を高めることはできる。

3ロールモデルとなるディスレクシア成人当事者との交流は児童生徒の成長支援になる

特定非営利活動法人エッジの成人ディスレクシア当事者で構成され能動的に情報を発信する会「NODE」メンバーが、メタ・エッジ参加者とすべてのイベントに関わり、児童生徒たちが「同じ仲間」として話をする場面が多々見られた。

当初相談会で困りごとを相談することを想定してテスト実施して、質問と回答のやりとりがあり満足した参加者はいたが、関係性がまだできていない相手にいきなり困っていることを打ち明けるのはハードルが高そうでもあった。メタ・エッジでアバターになって対等に本気で遊び、気持ちがほぐれたところで、ZOOM で顔出し（アバター希望はアバターに）しておしゃべりをする形だと、本音で楽しそうに気持ちを伝える姿が見られた。児童生徒たちはディスレクシア成人当事者に困りごとを相談する場というより、同じような仲間として、自分のことを話して受けとめてくれる人がいる、明るい場を求めているようだった。

おしゃべりの中で、「こんなツールを使っている」とディスレクシア成人当事者が支援グッズを見せると、「自分も持ってる」と見せるなど、自分たちに役立つグッズ等の情報交換と共有につながる機会も見られた。会を継続するにつれて、学びのコツや役立つグッズの情報交換に話題が深められる可能性を感じた。

4本来の能力や表現力を発揮する場があれば、ディスレクシアの児童生徒は自信をつけられる

ディスレクシアアートコンペティションは、ふだん学業がふるわずほめられることが少ないディスレクシアの児童生徒が、表現力を発揮してプロフェッショナルの審査員に認められ表彰される貴重な機会となった。「とてもうれしい」というあふれ出る喜びをほとばしらせて話す児童生徒や、「家族、学校関係者、支援者一同で大喜びしている」という保護者が見られた。応募作品はどれも独創性があり審査員も個性を評価していた。応募期間と告知期間が短く、応募が少なかったため、次回は期間と周知範囲の拡大をすることで、より多くのディスレクシアの児童生徒が表現力を発揮する登竜門となるだろう。

こども委員としてメタ・エッジづくりに積極的に意見を出して関わった4名は、全員が「やってよかった」「また続けたい」と表明した。自分たちが要望することを出し合い、一緒に作り、実現する過程で、彼らが自信をもって発言をして、成長していく姿が明らかに見られた。彼らの見せる笑顔と明るく語る夢から、「ディスレクシアだから大丈夫」「ディスレクシアと気づいたらできることがある、明るい未来がある」という、明るいディスレクシア像を社会に向けて発信する大切さを当団体が学ぶ機会ともなった。

＜今後の考察と展望＞

ディレクシアの仲間や先輩につながりたいときにつながれる場は、「同じ仲間や先輩がいる」「自分の力を出せる、認められる」と児童生徒が自信をつけて成長していく場となる。学校生活では読み書きに苦戦したり孤独感を味わったりすることがあるかもしれないが、ディスレクシアの仲間と、読み書き困難を補う知恵や情報を共有することが、心理面での大きな支えになることは間違いない。今後も当団体はディスレクシアの児童生徒の居場所としてメタ・エッジを継続する予定である。1年限りでこども家庭庁委託は終了するため、財源面での課題に直面するが、それを補う施策を今後検討する。

全国のディスレクシアの児童生徒に居場所を広げていくためには、まず LD/ディスレクシア支援民間団体や地域居場所事業者との連携が考えられる。2023 年 10 月に初めて特定非営利活動法人エッジ主催で協力団体と開催したディスレクシア月間を軸に連携を強化したい。そして何よりも地方自治体・学校がディスレクシア児童生徒を早期発見・把握して学びを支援していく仕組みを作り、その中でディスレクシア児童生徒が集える場があることを周知していくことが、この事業に不可欠である。

⑥成果の公表方法

エッジホームページを主に、当団体メールマガジン、ニュースレターで成果は公表する。個人情報の取り扱いに注意して抜粋して掲出する。